

阿部安成 著『島の野帖から——
ハンセン病をめぐる療養所が
ある島でのフィールドワークから
歴史を縁どる試み』

(滋賀大学経済学部研究叢書第51号)

滋賀大学経済学部

2018年、287pp.

福浦厚子

Atsuko Fukuura

滋賀大学 経済学部 / 教授

「当事者も記録者も研究者も、それぞれに自分が知ろうとする療養所に生じたひとつひとつの出来事を歴大で茫漠とした歴史のなかから摘みあげながら、そのひと摘みずつの発見をとおして、ひとの生というものについての考え方にくふうを凝らす——こうした課題をそれぞれに背負っているようにわたしはおもう」(p.135)

本書は題名にある「野帖」つまり現場でのフィールドワークの際に用いるノートのなか書き留めた、現場での人や造物(もの)との邂逅をめぐる叙述の形をとっている。そして著者は「フィールドワークをとおして発現する事態として自分自身をみつめるだけでなく、対象をどうみるのか、どうとらえるか、どのように認識し記述するのかが、おもに問われているとき……『自分自身』がいわば俎上にあがるとの自覚がみせられているのである」と研究の覚悟に言及する。

また歴史学者が現地で資料と対峙する姿勢について、色川大吉の『歴史の方法』の第2部「歴史叙述の方法——『近代国家の出発』を分析モデルに」を引用しながらつぎのように述べている。

だから、夜中に曇がふる葦の草むらの中に自分も身をひそめて、寒中に黙ってそこに座る。イメージの中で。かなた地平線の上に、三時か四時頃、東雲の赤味をおびた光が、空際の縁どりのように見えてくる。荒涼たる光景。大きな暗雲の下で、真冬の冷たい曇が葦の原を叩いて渡る。そういう時に研究者が、その九十年前の無名の百姓達は何十人か、そこで、もうどうにもならない限界状況の中で、思考を極限までつきつめて座って、なおかつ方途をみつけることができなかつたという状況に自分を融けこませる。そうするとその瞬間に、今自分がみている相模原の風景が、一九七〇年代の風景ではなくて、突如として歴史の原風景に変わっている。——色川はこの「原風景」を、「歴史叙述における風景は、今、目の前にしている単なる風景ではない。過去の風景なのだけれども、それは研究者の主体と歴史的情况とが内面においてクロスした時、そこに一つの火花の散るようなスパークがあって、始めてその瞬間に風景が原風景に変貌するのである。そして、その原風景が見えてきた時にはじめて歴史叙述が可能となるのである」と、みずからの「歴史叙述」とつなげて説いたのだった。

このように著者は歴史を扱い、歴史を描く取り組みに関わる自らの関わり方について真摯な問いを投げかけている。つまりここで立場性（ポジショナリティ）の問題を提起しているのである。立場性とは、千田が「他者との関係で自分がどのようなものとして立ち現れてくるのか、その位置性」であると述べているとおり、他者が私を何者であると名指しているのかを指す用語として、アイデンティティの対比で用いたが（千田 2005:270）、この点について意識的であることこそがまず研究の出発点として必要になるのだろう。

つぎに本書の章構成を紹介する。

- I 島のフィールドワークと歴史学研究と〈わたし〉と——はじめに、にかえて——
- II 島の野帖より
- III 島の逐次刊行物——おわりに、にかえて——

I章は書下ろしである。II章は著者が調査と研究を実施した香川県高松市の大島にある国立療養所大島青松園内で編集発行されている逐次刊行物『青松』（編集青松編集委員会、発行者国立療養所大島青松園協和会）に寄せた原稿を元に加筆修正したものであり、本書の紙幅の大半がここに割かれている。III章は公刊されたワーキングペーパーなどを中心に大幅加筆したものである。

本書全体をとおして、大島の刊行物とその重要性が論じられている。主要な逐次刊行物は、1919年にキリスト教信徒団体の霊交会が発行を始めた『霊交』、1932年に創刊された『藻汐草』、同年創刊の『報知大島』であるが、いずれも第二次世界大戦の戦時下に休刊や廃刊になった。大島での刊行物が姿を消した戦時下で、手書き手作りの回覧雑誌『青松』が作りだされ、それは今日まで引き継がれている。また、著者の調査により、これらのほか

に1914年から刊行された「娯楽会」や1931年から2011年までの自治活動と大島の様子が記録された「自治日誌」なども見つかっている。なかでも『報知大島』は、自治をめぐる思索や議論の場として療養者に提供された自治組織の機関紙でありニュースでもあり、当時の人びとの自治への取り組みを知ることができる重要な刊行物と思われる。

また、II章の#30-33における三宅官之治（1877-1943）の遺骨の帰還、帰郷、父母の墓との合葬をめぐる話はとても珍しい話として印象的である（pp.174-195）。三宅は1910年大島青松園に入所し、クリスチャンとして神の愛の実践に努めた。三宅が亡くなった翌年1944年、高松東教会の宮内岩太郎牧師は彼の「遺骨を抱き、はるばると彼の故郷を訪れ〔中略〕、村人によつて小山の裾に案内された宮内牧師は〔中略〕中央に故人を、両側に並べて父母の名を刻んで貫つた」。発症をきっかけにそれまでの土地を離れ、親や兄弟とも離れることになったであろう人たちは、たとえ亡くなくても多くは郷里へ帰ることが叶わなかったものと考えられるのである。

本書を通して、著者はハンセン病療養所を訪ね、歴史研究の資源となる資料の保存と公開のために注力していることがわかる。つまり、そのことで誰もが一次資料へアクセスできるよう目録を作成し公刊しているのである。その成果として、近現代資料刊行会より著者が監修・解説したリプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ『報知大島』『藻汐草』『霊交』、ならびにリプリントハンセン病療養所シリーズ『選ばれた島』（青木恵哉著、阿部安成、石居人也監修・解説）が刊行されている。

さらに本書のII章には、資料との出会いにまつわる出来事が多く記されているが、この章は同時に、その資料をもとに研究論文として成果がどのよ

うにまとまったのか、その在りかを示すディレクターとしても読むことができる。

最後に、本書の読者に残された問いについて二点挙げておきたい。大島には人や造物、音や声などさまざまなやり取りが行われていることが理解できる。それを著者は本文中で交通という語で表現していたが、その交通のなかで協働とよばれるようなことはなかったのであろうか。例えば、矢内原忠雄が四度島を訪問したことが記されているが、その訪問により、矢内原と療養所の人びととの間になにか協働的とみなしうるようなことがあったのか、あるいは一方向的で非対称的な関係が続いていたのか。人や造物といったさまざまなアクターがそれぞれに関係性を連動させるのであればとも思いうのだが。

二点目は、大島における自治、あるいはハンセン病療養所での自治をどのように理解すればよいのかという問いである。本書では「自らを」治めるという表現が用いられているが、自己を統治や治人の対象とする場合、統治の技法としての大島の自治とはどのように考えればよいのか、是非とも知りたいと思った。

参考文献

- ◎ 千田有紀「アイデンティティとポジショナリティ——1990年代の「女」の問題の複合性をめぐって」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、267-287頁、2005年。

